



国体だより その3

各種ソフトボール大会の 県予選会が行われました

4月23日、国体ソフトボール（成年男子）競技会場の神原スポーツ公園で、『第22回西日本壮年ソフトボール大会』、『第26回全日本クラブ男子ソフトボール選手権大会』の県予選会が行われ、上位大会への出場権をかけて熱戦が繰り広げられました。



ムが出場しており、数々の迫力あるプレーが見られました。

また、今回、初めて同大会に出場した地元チーム「高梁ソフトボールクラブ」は、試合には敗れたものの、攻守ともに健闘して会場を大いに沸かせました。

なお、試合の結果、「鳥城クラブ」が西日本壮年大会（5月14日・15日、徳島市）へ、「操明クラブ」と「平林金属ソフトボールクラブ」がクラブ男子中国予選会（5月28日・29日、尾道市）への進出を決めました。

本大会には、競技アナウンスとして、市内の会社員や主婦など16人で構成される「高梁アナウンス研究会」も参加。国体秋季大会に向けた実地練習として、真剣な面



持ちでアナウンスを行っていました。

『民泊協力会推進協議会』 が設立されました

国体開催期間中には、全国各地から選手・監督など多くの人が本市を訪れます。宿泊施設の不足が予想されるため、ソフトボール（成年男子）競技会に出場する16チームの選手・監督の宿泊は、地域の公民館等にお世話をしていたり、共同民泊としています。

現在、受け入れ予定の15地域では、それぞれ民泊協力会が発足し、準備が進められています。

各民泊協力会の代表者による『晴れの国おかやま国体高梁市民泊協力会推進協議会』が、このたび設立され、4月27日、第1回連絡会が開かれました。各民泊協力会のこれまでの取り組みを紹介するとともに、活発な意見交換が行われました。この協議会は、民泊協力会同士の間を密にするとともに、準備を進める中で生じた問題点や疑問点を話し合う情報交換の場を持つことで、より円滑に受け入れ準備を進めていくことを目的に組織されたものです。



方谷先生を訪ねて

2

有終館学頭時代 — 教える —

天保七（一八三六）年九月、二十二才の山田方谷は三年の遊学期間を終え、藩主勝職に随って帰藩しました。十一月に有終館の学頭（校長）に命じられ以来十数年、藩士教育に専念することになります。

方谷が学び教えた儒学は、修己治人の学といわれ、孔

子・孟子（二千四、五百年前）

が乱れた世の中を平和で安心して暮らせる社会にと説いて歩いた学問で、修業により徳のある人間になり、国を治め、平和な社会をつくる、治国・平天下を目指した学問です。彼は先人の教えを学び、その知識をもって正しい行いをする朱子学から、実行に際して自分の心の判断を重視し、誠意をもって物事に対処する陽明学へと進み、中国の歴史を研究し、多くのことを学びとりました。その上で幕府の教育方針に従って朱子学を教えました。

板倉勝澄（初代）は松山藩主となつてまもなくの延享三（二七四六）年、御殿坂のほとり（現日新高校校庭）に学問所を開き、四代勝政はそれを有終館と命名し、藩校として



藩校、有終館跡

確立します。天保二年の火災の後は中之町（現高梁幼稚園）に場所を移しました。しかし方谷が学頭になった当初は、藩士の学習意欲は乏しかったと言われています。一方、彼の指導を求めて遠近から集まる学生のために、御前町に賜った自宅に牛籠舎（塾）という家塾を開きました。

が、松山藩では家塾を知る者は少なく、数十人が常に入塾していても藩士で受講する者は文弱とそしられ、書物を懐に隠して通ったと言われています。

牛籠舎の塾規に「職業三条 — 立志・励行・遊芸」が掲げられ、学問を専門に学ぶ人は、まずしっかりと志を立て、

学問修得に専念し、教養を高めて詩文など芸の世界で楽しむことを目指し、わき目も振らずに勉強する者だけに在塾を認めました。特に冬は夜の時間が長いので、勉強するのに適しているから励むようにと指導しています（江戸時代は日の出と日没の間を等分して時刻を決めていたので、冬は昼の時間が短く、自習する夜の時間が長い）。牛籠舎で学んだ人々のなかに進鴻溪や三島中洲がいます。彼らは、後に藩士となって藩の要職を歴任したり、学頭となつて方谷の志を継いで活躍しました。

有終館の学習は、特に勝静が藩主になつてから「文なき武は誠の武にあらず」と剣、弓などの武術と共に文（儒学）の学習に力を入れるようになりました。藩士の子弟は七才以後、全員に有終館学習を義務づけ、文武で優れた人は更に藩費で遊学をさせています。有終館で学んだ人々が後に藩政を担い、大きな力を発揮しました。

した松平定信の孫にあたります。伊勢桑名藩より松山藩主の養子として迎えられ、二十二才で松山に入ります。彼の教育係として奥田楽山（前学頭）と方谷があたりました。方谷は勝静について「文学は家中及ぶ者無く、武術は毎日なされ（中略）承りますとこれまで夏の昼寝と冬の暖炉はなさいませんとのこと」と伝えていきます。

方谷は「資治通鑑綱目」という歴史書から中国の唐の君主の事蹟を教えて討論し、君主としての政治の心構えを説き、藩政についても意見が交わされました。そうしたなかで君臣、師弟として心が固く結ばれました。この関係をのちの人が「水魚の交わり」と言ったほどです。やがて勝静が藩主となると、方谷は藩の行財政全般の仕事を任されることになるのです。

（文・児玉享さん）
—— 来月号につづく ——
牛籠舎跡（臥牛山の南麓にあったのでこの名をつけた）

勝静は寛政の改革を



御殿坂（後方は高梁高校。当時、藩主の館・御根小屋がありました）

